

第3章 言語の音とは：音声学・音韻論（田中伸一）

<基本問題>

1. 子音の間こえの階層は、「渡り音[w, y]> 流音[r, l]> 鼻音[m, n, ŋ]> 摩擦音 [f, v, s, z, θ, ð, ʃ, ʒ]> 閉鎖音[p, b, t, d, k, g]」である(この名称は「音の記号」参照)。この観点から、頭子音連鎖の *spit*, *step*, *sketch* や、尾子音連鎖の *lapse*, *blitz*, *tax* が、なぜ奇妙なのかを答えなさい。

(解答例) *spit*, *step*, *sketch* は頭子音内で聞こえが下がっているのに許容されている点が、奇妙である理由となる。同様に、*lapse*, *blitz*, *tax* は尾子音内で聞こえが上がっているのに許容される点も奇妙である。

2. (8c)の仮説3は、*nasi-eru*「なし得る」/ *naseru*「なせる」、*kaki-eru*「書き得る」/ *kakeru*「書ける」、*kati-eru*「勝ち得る」/ *kateru*「勝てる」のような例で、母音連続回避の手立てとして誤った予測をする。どのように誤った予測になるかを、次の表を埋めながら説明しなさい。

V ₁	+	V ₂	→	V _{1,2}
i [, -lo, -ba]		e [-hi,]		*i []

(解答例) 下図のように、[i]の[+high]と[e]の[-low, -back]を合成すると*[i]を予測するので、*nasi-eru* → **nasiru*のような誤った結果を導いてしまう。

V ₁	+	V ₂	→	V _{1,2}
i [+hi, -lo, -ba]		e [-hi, -lo, -ba]		*i [+hi, -lo, -ba]

<発展問題>

1. 英語の頭子音連鎖は、*pray*, *blue*, *twin*, *dwel*, *cream*, *glow* のように2つまでと決まっている。また、尾子音連鎖も、*pulp*, *hint*, *wolf*, *risk*, *realm*, *act*, *opt* のように単母音の後ろでは2つまでしか許されない。一方、長母音・二重母音の後ろでは *sheep*, *boat*, *cake* のように原則的に1つだが、*beast*, *paint*, *find*, *fault*, *cold* のように2つ出てくる例は、すべて調音位置が同じで「1つ」として扱われる。つまり、CCVCC, CVVC が最大音節だということになる。そこで、もし2つが「1つ」として扱われる条件が、調音位置が同じであること、あるいは sC または Cs(C=[p, t, k])であることだとすれば、*spring*, *string*, *screen*, *sp[y]ew*, *sq[w]uid* のような3つの頭子音連鎖や、*corpse*,

waltz, Marx, midst, next のような3つの尾子音連鎖は、その聞こえと個数の奇妙さの問題をどのように解決できるかを答えなさい。

(解答例) もし sC または Cs ($C = [p, t, k]$) が「1つ」として扱われ、かつ(6)の下で論じたように聞こえの低いほうが主要部であるなら、その1つの分節音の聞こえも閉鎖音と同等となる。したがって、*spring, string, screen, spew, squid* は頭子音内で聞こえが上がって聞こえ連鎖の原理に従うし、また最大2つまでの子音連鎖条件にも従うことになる。同様に、*corpse, waltz, Marx, midst, next* も尾子音内で聞こえが下がるか同じか(つまり上がらない)なので、2つの原理(聞こえ連鎖と子音2つまでの条件)に従うことになる。

2. 基本問題2で述べた弁別素性理論の経験的問題が、エレメント理論によりどのように解決されるかを、| | 内のエレメントを埋めながら説明しなさい。その際、この母音連続では聞こえが上がる点に注目して、 V_1 と V_2 の両方が主要部になる場合と、 V_2 のみが主要部になる場合に分けて、主要部に下線を引いて説明せよ。

V_1	+	V_2	→	$V_{1,2}$
i		e		*

a. V_1 と V_2 の両方が主要部

V_1	+	V_2	→	$V_{1,2}$
i		e		e

b. V_2 のみが主要部

(解答例) *nasi-eru* 「なし得る」、*kaki-eru* 「書き得る」のような母音連続は、聞こえが上がるので二重母音を形成し得ず、 V_1 と V_2 の両方の核母音(=主要部)が併合されることになる。これは下図のように二重主要部を招き、定義できない実体となるので、融合が不適用となる。その代わりに、渡り音挿入が共謀して、*nasi-(y)eru* 「なし得る」、*kaki-(y)eru* のように[y]が挿入される。なお、(16a,b)のように、挿入渡り音が[y]か[w]かは、先行母音が前舌か後舌かによる。

V_1	+	V_2	→	$V_{1,2}$
i		e		*

一方、もし V_2 のみが聞こえの高さゆえに主要部だとすれば、下図のように、*naseru* 「なせる」、*kakeru* 「書ける」のように[e]に融合する。

V_1	+	V_2	→	$V_{1,2}$
i		e		e

この例は変則的な例でありバリエーションも可能だが、少なくとも誤った例を予測せずバリエーションも導けるという点では、弁別素性理論よりもエレメント理論による説明のほうが妥当であろう。